



《色変鶴菱文唐織》
—第2展示室 春の優品選より—



藤井外喜雄《ロシアの少女》大正12年
—第4展示室 石川の美術 近代編より—

■ 婚礼調度の美

前田育徳会尊經閣文庫分館

■ 春の優品選

第2展示室(古美術)

■ 石川の工芸Ⅲ 食を彩る

第5展示室(工芸)

■ 石川の美術 近代編

第3・4・6展示室(絵画・彫刻)

- 今年度の企画展を振り返って
- 企画展Topics「脇田和展」
- 3月の企画展示室
- ボランティア活動について

- ホームページ新
- 来館者数1,000万人突破！
- 次回の展覧会
- アラカルト ただいま展示中

婚礼調度の美

2月18日(木)～3月26日(土) 会期中無休

二月より溶姫(一八三～六八)の婚礼調度を展示しています。溶姫は十一代將軍徳川家斉(一七七三～一八四二)の二十一女として生まれ、文政十年(一八二七)、十三代前田斉泰(一八一～一八四)に輿入れします。家斉は若干十一歳で將軍職に就いたため、松平定信(老中首座・將軍補佐職)が政治的実権を握り、寛政の改革による積極的な幕府財政の建て直しを図りました。しかし、あまりに嚴格過ぎたため次第に家斉や幕府上層部からの批判が起こり、定信は罷免され寛政の改革は終わりを告げます。その反動から家斉自らも奢侈な生活を送るようになり、幕府財政の破綻・幕政の腐敗・綱紀の乱れなどが横行し、財政圧迫により次第に幕藩体

制に崩壊の兆しが見えはじめる時代でした。そして、家斉は男子二十六人・女子二十七人を儲け、多くの子女が大藩の大名へ縁組することで血縁関係による大名統制を行い、將軍の子女を迎える大名には、それに伴う儀礼など経済的負担を課すこととなります。同時に大名家に縁組させることは、幕府の財政を大きく圧迫することでもありました。

新年早々、幕末の様子を示す金沢城二の丸御殿の絵図発見というニュースがありました。溶姫はまさにその時代を生きた奥方であり、江戸の上屋敷で人生の大半を過ごしましたが、江戸が明治へ変わる一八六八年、国許の金沢城・金谷御殿へ入りました。が、わずか一カ月半余りで亡くなりました。

《姫君入輿行列図巻》(部分)

春の優品選

2月18日(木)～3月26日(土) 会期中無休

今号では、文の視点から選んだ作品の見所を紹介いたします。最初は《人麻呂画像》です。万葉集の歌人である柿本人麻呂は、平安時代にはいり特別に評価され、歌聖としての地位が確立されます。それにともない、十二世紀には神格化された人麻呂の画像を掲げ、和歌を献じて歌道精進を祈念する「人麻呂影供」が行われるようになりました。室町時代十六世紀頃に描かれた本作も、「人麻呂影供」のために制作されたと判断されます。

続いては、県文に指定されている《手鑑》です。本作は、奈良時代八世紀の聖武天皇から江戸時代十八世紀の公卿・歌人に至る筆跡二七四葉を収録したもので、山川家に伝来しました。成立は十八世紀前半頃と考えられ、仏書関係に較べて和歌関係や

『源氏物語』が数多く収録されている点が注目されます。文学の流れで、今回は五十嵐派の漆芸作品から硯箱と文台を選びました。五十嵐道甫の作と伝えられる《蒔絵春秋花卉図硯箱》は、蓋表に牡丹、蓋裏と身の内側にわたり「垣に秋草」の意匠が、蒔絵の技法を駆使してあしらわれています。五十嵐与右衛門の作と伝えられる《蒔絵住吉図文台》は、蒔絵で反橋、州浜、松、桜を表現し、和歌の神・住吉明神をまつる住吉大社の風景であることを示しています。

最後は能装束です。江戸幕府が能を接待・饗応・儀式の公式芸能と定めたことから、大名家は能の振興に注力しました。そこで今回は文武二道の融合として、前田家に伝来した絢爛豪華な唐織二領を選びました。



《人麻呂画像》

第6展示室

石川の美術

近代編

2月18日(木)～3月26日(土) 会期中無休

本県の日本画と洋画に関していくつかのエピソードとなった出来事がありますが、最大のものが大正十三年の金城画壇創設でした。日本画と洋画の二部門制で、以降昭和十八年まで毎年公募による展覧会を開催し、会員相互の研究會や新人の登竜門として、石川の絵画レベルアップに寄与したのです。その誕生の契機は、大正十二年九月に起きた関東大震災でした。本県では県立工業学校が、高等美術学校である東京美術学校に人材を送り出していました。卒業後も東京で制作活動が続けた人たちが、震災により一時帰郷を余儀なくされ、郷土の旧泰然とした状況に奮起して金城画壇を組織したのでした。戦後二十年の秋に誕生した『現代美術展』は戦争末期の十九年に解散させられた金城画壇展の拡大展といえます。

今回は相川松瑞や飛鳥哲夫など、金城画壇主要メンバーの作品を交えて戦前までの絵画を紹介します。彫刻部門では館蔵の優品を中心に、石川の近代彫刻の歩みを眺めます。わが国の近代彫刻は明治維新の西洋美術・彫刻の受容に始まり、先ず銅像を象徴とする写実彫刻が興る一方、旧来からの仏師・宮大工を代表とする木彫の分野も近代化を進め発展、塑造と木彫は互いに影響し合い近代日本の彫刻を形成していきます。本県では、近代日本銅像の嚆矢である日本武尊像が兼六園に建立されたほか、彫刻科を含む県立工業学校の開校や勲業博物館の創設等々全国に先駆けた展開が特徴です。明治後期以降、美術振興の中心として展覧會が盛んになると、本県彫刻家たちの中央での活躍も盛んになり、地元美術の振興へと繋がりました。



吉田三郎《或る抗夫》

第5展示室

石川の工芸Ⅲ

食を彩る

2月18日(木)～3月26日(土) 会期中無休

二月に引き続き、第5展示室では食を彩ると題し、器本来の用途に目を向けた展示を行っています。近現代工芸作品、とりわけ陶芸作品は大型化しており、従来の伝統的な懐石料理に用いることは難しいのですが、今回はこのような陶芸作品の中から十点を選び、多様化する和洋のスイーツをとりあわせて、壁面にパネル展示しています。使用した作品を壁面に近いケースに展示していますので、あわせてお楽しみいただけます。ここで紹介する十通りの組み合わせはほんの一例です。それぞれの組み合わせを考えてみてはいかがでしょうか。

今回、漆芸や木竹工の作品は、いわゆる伝統的な

懐石料理や茶席等に用いられる形のものを展示しています。高めの高台に水文の蒔絵が施された、松田権六の《水文蒔絵漆椀》は、形の美しさや作品としての品格の高さは言うにおよびませんが、傷が付きやすい口周りに装飾がないことで、実用性においても考え抜かれていることが分かります。また、川北良造の《櫻造食籠》は木目を生かした丸みのある形ですが、菓子箸をのせることができるように蓋の甲面の角度は、極めて緻密に仕上げられ、茶席で用いる際に取り回しがしやすくなっています。どのような場面でも、どのように用いられるのかという制限の中で、極められた美しさをご覧ください。



川北良造《櫻造食籠》

第7展示室

第39回

伝統九谷焼工芸展

3月4日(金)～21日(月・振休) 会期中無休

昭和五十一年に認定された石川県指定無形文化財保持団体九谷焼保存会が、技術保存・発展向上を図るための事業として毎年行っている公募展で、今回は三十九回目となります。入選作並びに九谷焼技術保存会会員の作品を一堂のもとに展示します。

◇入場料／一 般三三〇円(二八〇円)

大学生二八〇円(二二〇円)

高校生以下無料

※()内は二十名以上の団体料金になります。

当館友の会会員は、会員証の提示により団体料金になります。

◇連絡先／能美市泉台町南十三番地

石川県九谷会館

電話：〇七六一―五七七一―二二五

第9展示室

石川県金沢辰巳丘高等学校 第28回 芸術コース美術専攻 卒業作品展

3月4日(金)～6日(日) 会期中無休

本校芸術コース美術専攻は『美術系大学への進学に対応した実技力の育成』を目標に、昭和六十一年に創立して以来、美術の基礎・基本の定着と高い造形表現力の育成を行ってまいりました。卒業生は金沢美術工芸大学をはじめ全国の美大・芸大・美術教育系学部へと進学し、絵画、彫刻、工芸、デザイン、映像、アニメーション、現代美術、そして教育界など地元石川のみならず全国各地、さらには海外において美術文化や美術教育の担い手として活躍しております。

この展覧会は今年度の卒業生二十八名が、日本画、油絵、彫刻、デザインの四つの専科での学習成果を展示発表するものです。この機会を通して、本校美術専攻生徒と本校美術教育の一層の成長・発展への励みにしたいと考えております。

◇入場料無料

◇連絡先／石川県立金沢辰巳丘高等学校 詠周史

電話：〇七六一―二二九―二五五二

3月の企画展示室

企画展示室

玄土社の二〇一五年の活動をまとめた創作四十二点、臨摹十九点をお目にかけます。自由な発想と感性による前衛書(抽象)と、古典への理解を深める臨摹(写し)の作業は、切っても切れないワークです。この姿勢はぶれることなく、通算すれば四十二回展となる玄土社の世界をご覧ください。

昨年、東京の五島美術館内茶室古経楼の新加賀茶会、金沢のイヅの茶会。この二つの茶会の本席茶掛は、表立雲の前衛書で、この意外性に来会者の視線が集まりました。現代建築の壁面だけでなく、茶室の空間にも納まる前衛書の魅力を感じてくださればと思います。(松村知春)

◇入場料無料

◇表立雲トークタイム「十七帖と周辺の透影鑑別比較」

日時：三月十三日(日)午後一時三十分～

◇連絡先／金沢市本多町一―七―十五 玄土社

電話：〇七六一―二六三―〇二二二

三月の行事予定

■土曜講座 午後1時30分～ 美術館講義室 入場無料	
5日(土) 石川の戦争画	二木伸一郎
12日(土) 吉田三郎―人と芸術―	北澤 寛

早春のミュージアムウィーク

13日(日) 午後2時00分～ 美術館ホール 入場無料

■特別講演会「世界の無形文化遺産となった和食文化」

講師：熊倉功夫氏(静岡文化芸術大学学長(一社)和食文化国民会議会長)

※要申込(定員二〇〇名・先着順)

【申込方法】県文化振興課〇七六一―三三五一―三七二(または、県立美術館〇七六一―三三―七五八〇)へお電話下さい。

第8・9展示室

‘15 玄土社書展

3月11日(金)～13日(日) 会期中無休
午後5時閉室

平成27年度の企画展を振り返って

平成二十七年は、待望久しい新幹線金沢開業の年でした。新幹線を利用して遠来からお越しいただくお客様に、「石川ならではの美術」をご覧いただくことを年間の方針として、三つの企画展を行いました。

春は「加賀前田家百万石の名宝」を開催しました。加賀藩前田家が収集し、公益財団法人前田育徳会が管理する尊經閣文庫の名品を中心に、国宝十五点、重要文化財三十五点を含む一二〇点からなる展覧会で、新幹線の開業記念という特別な機会であったからこそその規模と内容となりました。昭和五十八年の当館の開館以来ひびきの公開となる作品もあり、多くの話題を集め、県内外から二万三千人もの来場者がありました。文化によって地域の独自性を打ち出した加賀藩の文化政策を、文武両面に関わる歴史的名品を通じてご覧いただくことにより、石川県や金沢市の魅力を全国に発信するまたとない機会となりました。



加賀前田家 百万石の名宝



没後30年 鴨居玲展 踊り候え



工芸にみる石川の巨匠

秋九月の「没後30年 鴨居玲展 踊り候え」では、洋画家鴨居玲の軌跡をたどり、その魅力に迫りました。没後十年、十五年、二十年と過去三回、大規模な回顧展を行ってききましたが、今回は新幹線金沢開業のPRもあって、五月に東京ステーションギャラリーで先行開催しました。代表作はもとより、今回初めて出品される作品もあり、好評を博しました。イーゼル、絵筆、絵の具などの遺品も公開され、画家鴨居玲の魅力を伝えることができました。今回は、会期中に「フラメンコライブ 鴨居玲に捧ぐ」と「イ・スンジヤ 望郷を歌う」という二つの関連イベントを行いました。フラメンコでは企画展示室前のロビーに、三〇〇名ほどの観客が集まり、情熱あふれる踊りに魅了されました。イ・スンジヤさんは、「望郷を歌う（故高英洋に）」のモデルとなった方で、鴨居との思い出やエピソードを語っていただきました。

新春一月には「工芸にみる石川の巨匠」を開催しました。石川の工芸を知っていただく企画で、これまでに石川県が輩出してきた芸術院会員六名、重要無形文化財保持者（人間国宝）二十二名の作品を展示しました。石川を代表するばかりでなく、わが国の近現代工芸の第一人者ともいえる人々で、改めて石川の工芸の水準の高さを感じることとなりました。雪模様の天候もあって出足こそ少なめでしたが、日を追って多くの入場者を集め、会期中の一月三十一日には、昭和五十八年に当館が開館してから一千万人目の来場者を迎えました。年間三十万人ほどが来館した勘定ですが、三十三年間で開催してきた企画展は一〇七になります。本年開催の三つを含め、いずれも石川ならではの企画で、思い出深い展覧会であったかと思えます。今後とも、地方色豊かな美術館に努めて参りたいと思います。

寄附受納記念 脇田和展 一鳥に詠う一

4月24日(日)～5月15日(日) 会期中無休

軽井沢の脇田和美術館を運営する脇田美術財団より三二七点の脇田和作品をご寄附いただきました。ドイツ留学中の初期作品から中期の大作《雲崗石窟》《暖帯》《ポンコツ車を誘導する鳥》などの後期作品、そして《画房夢想曲》などの晩年の代表作まで、名品がずらりと含まれています。これで脇田和氏がアトリエと美術館を建てた制作と鑑賞の地である軽井沢と、先祖が代々暮らした金沢とで、脇田作品を存分に堪能することができるようになりました。北陸新幹線により金沢から軽井沢まで約一時間半と大変身近にもなり、両館共通の特典も計画しています。

今回の脇田和展は、ご寄附いただいた作品、油彩一五一点、素描七十二点、版画九十四点の中から、約半数の一五〇点をまずご覧いただきます。そして今後はコレクション展示室で特集を組むなどして全貌を紹介していきたいと思えます。

現代日本洋画壇の第一人者として活躍した脇田和氏(一九〇八―二〇〇五)は、主に鳥と子供、画家の日常を題材に描き続けました。詩情豊かな作品は、至純ともいふべきで、深く温かな感動を見るものに与えます。明治四十一年、金沢出身の実業家脇田勇の次男として、東京青山に生まれた脇田氏は、十五歳でドイツ・ベルリンに留学し、八年間絵画や各種の版画技法など美術全般にわたって研鑽を積みました。

帰国後は戦前の洋画壇に頭角を現し、昭和十一年、猪熊弦一郎、小磯良平らと新制作派協会を創立して、以後、常に具象絵画の第一線にあつて画壇をリードしました。抒情的であると同時に堅固な構成を持つ氏の作品は、情と



《暖帯》1985年



《少年と鳥》1957年



《ポンコツ車を誘導する鳥》1981年

智とが高いレベルで融合し、その融通無碍の世界は様々な世代から幅広い支持を得ています。

冒頭に「先祖が代々暮らした金沢」と述べましたので、ここで脇田氏と金沢との縁をご紹介します。脇田家は加賀藩初期より前田家藩士として金沢に居を構え、町奉行をつとめるなど代々活躍した家柄で、維新後に東京に移られたのでした。現在、兼六園に隣接する県指定名勝・庭園玉泉園の周辺一帯が旧脇田家の邸宅跡とされます。

また、脇田和氏は大正十二年から昭和五年までの八年間、ドイツに留学するのですが、その間の下宿先がエルンスト・ウォルフアルト家で、ウォルフアルトは明治三十五年から大正八年まで金沢の第四高等学校で、ドイツ語とラテン語の教師をつとめていました。若き和氏はウォルフアルトから日本の伝統美術のすばらしさを学んだといえます。先祖、そして下宿先の主人まで、脇田氏と金沢には深い縁があります。

なお、記念講演として五月一日午後一時三〇分より当館ホールにて、東京芸大で共に教え、二人展を開かれた画家野見山晁治氏に「僕が知っている脇田さん」と題してご講演いただきます。今回の脇田和展、オープンまでぜひお楽しみに、お待ちしております。

ホームページ一新

平成十二年の開設以来、ご愛顧いただいた当館のホームページがリニューアルします。開設当初より展覧会など基本情報にくわえ、ほぼすべての所蔵作品を網羅した画像付データベースをそなえるなど、地方美術館として例を見ない充実したページでした。今回のリニューアルでは、充実した内容をさらに使い勝手よく、利用者親しんでいただけるホームページを目指しました。

新しいホームページの特徴のひとつは、パソコンはもちろん、スマートフォンやタブレット端末にも対応する仕様としたことです。タッチ画面のタップやスワイプといった動作、さらに画面の回転を想定したつくりとしました。またトップページを始め各ページとも、美的な外観にこだわった作り込みがしてあります。このデザインは、今後五年や十年は陳腐化することがないでしょう。年度当初には皆さまにお披露目できるよう、鋭意制作中です。乞うご期待。

来館者 1000万人突破

一月三十一日(日)、石川県立美術館は昭和五十八年の開館以来一千万人を達成。当館ロビーで晴れやかにセレモニーが行われました。この日、晴れの一人万人目となったのは福井県越前市の永谷隆さん、富喜子さんのご夫妻です。お二人は年に数回は当館を訪れてくださっているそうです。セレモニーでは、金沢大学フィルハーモニー管弦楽団による演奏が花を添え、多くの報道陣がカメラを構える中、谷本知事、鳴崎館長、永谷ご夫妻がくす玉を割ってのお祝いとなりました。

当館はこれからも地域色豊かな、皆さまに愛される美術館を目指してまいります。



次回の展示

第3～9展示室

第七十二回現代美術展 「洋画・工芸・写真」 会期／4月2日(土)～19日(火)

前田育徳会尊経閣文庫分館

名物製と香道具 会期／3月31日(木)～4月19日(火)

第2展示室

加賀文化の粋 会期／3月31日(木)～4月19日(火)

当館では平成二十六年より、美術館ボランティアを募り、現在十五名ほどの方が美術館活動にご協力いただいております。

おもに皆様にお願ひしている活動は、眠っている資料の整理です。開館以来三〇年にわたり蓄積された新聞記事やスライドなどの膨大な資料は、博物館活動におけるいわば宝の山。この宝の山も放っておけば、ただの持ち腐れです。これら膨大な資料に紐付けをするこゝとで有用なデータへと生まれ変わります。現在ボランティアの皆様には、眠っている資料の山をデータベース化するお手伝いをしていただいております。パソコンが堪能な方はデータ入力も、また手作業を好まれる方は新聞記事の整理などをお願いしております。

このボランティア活動は、さらに他の活動への拡大も思案中です。随時申し込みを受け付けておりますので、興味がある方はお気軽にご相談ください。

ボランティア活動 について

「南方従軍素描集」より マライの少女

縦49.2cm×横32.0cm 色鉛筆・コンテ・水彩 昭和17年(1942) 第29回二紀展

宮本三郎 みやもと・さぶろう

明治38年～昭和49年(1905～1974)



太平洋戦争が勃発すると、国民の総力がいや応なく戦時体制に組み込まれていきました。昭和十七年、宮本三郎は軍の要請により戦争記録画制作のため、藤田嗣治、中村研一らとともに南方へ派遣されたこととなります。この作品も南方に赴いた際に現地の人々や風景を題材に描かれた素描の一つで、同年の二科展に出品されました。

二科会の指導者の一人安井曾太郎から、造形的な構成員と素描力を身につけるよう教えを受けた宮本三郎は、常に紙と鉛筆を持ち歩いて素描を続け、基礎的なデッサンを叩き込みます。アトリエには

膨大な素描が残されており、技巧の冴えはそうした修練の結果です。

本作は、従軍中に現地で日本人経営の幼稚園に依頼し、マライの子どもをモデルにして描いた作品です。澄んだ黒い瞳でこちらをじっと見つめるマライの少女には、今描かれたような臨場感が漂っています。鋭い観察力と強い表現力を表す線で描いた宮本三郎の素描には、生気溢れる美しさが感じられます。

このように、宮本の画業の展開の中で素描は一つの大きな領域を形成しており、宮本は「天性の素描家」といわれています。

友の会手続きが始まります

三月一日(火)より、来年度友の会新会員の募集、更新手続きが始まります。お申し込みは直接県立美術館で手続きいただくか、郵便振替をご利用ください。

現在会員の方も、継続を希望される方は、更新の手続きをお願いします。

■有効期限／平成二十八年四月一日～平成二十九年三月三十一日

■年会費／二、〇〇〇円

■主な特典

- ・コレクション展の無料観覧
- ・企画展入場券進呈
- ・企画展の開会式にご招待
- ・入館料の割引
- ・最新情報をお伝えする美術館だより(本誌)を毎月送付
- ・館内カフェにてドリンクの割引

平成28年度
会員証

富永直樹(大将の椅子)をクローズアップしたデザインです。日展を舞台に活躍した富永は、金沢美術工芸大学の名誉教授を務め、文化勲章を受章しました。

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 360円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料

※()内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション
展示室無料の日(3月は7日)

今月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00 年中無休

3月の休館日は
27日(日)～30日(水)

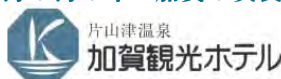
広告

片山津温泉

22種のお風呂で
おくつろぎ下さい

<http://www.kagakankoh-hotel.co.jp/>

日本海の海の幸や加賀の美食なら



〒922-0412 石川県加賀市片山津温泉ウ 41

加賀観光ホテル予約センター 受付時間 9時～20時

Tel. 0761-74-1101

石川県立美術館だより
第389号(毎月発行)
2016年3月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>